

疑似科学は、素人目には科学的かも知れないが、実際は科学とは無縁のものである。これに対し、仮説の立案は正当な科学の手続きの一部であり、そういう意味では、本書は正しく科学的な本である。

本書の記述は、正確ではあるが硬い感じのする学者の文章と、こなれてはいるがうわつつらを撫でているようなジャーナリストの文章との中庸を保っており、比較的読み易い。惑星探査機の成果などは、簡潔にしかも要領良くまとめられている。仮説/定説の問題を心に留めておきさえすれば、最近の惑星科学の発展を知るためにだけでも、本書を紐解くのもいいかも知れない。

堂谷忠靖 (宇宙研)

## 銀河にひそむモンスター

福江 純 著  
岩波書店, 144 ページ, 1100 円

本書は、数多くの天体现象の中で、特に活動銀河に焦点を当てて書かれた読物である。電波銀河、クェーサー、ブラックホール等の活動銀河に対す

る知識の拡大を、時系列に沿って説明している。断片的な知識を系統的にまとめるには適切な一冊である。

知識の拡大をもたらした観測手段の発達も、異なる波長をまとめて、時系列に説明している。大型干渉計や CCD カメラ等の新しい観測手段の開発が、いかに大きなブレイクスルーになってきたかも、本書によってよく示されている。並べて置かれた図を比べれば、一目瞭然である。

本書は、式も 1 本しかなく、適切な場所にイラストが入っており、非常に読みやすくなっている。また、クェーサーの衣や銀河からのジェット等の論文からの図の引用も、説得力を増している。本書を読むために必要な物理的知識は、本論からそれて適宜説明されている。少なくとも修士課程の大学院生程度であれば、本書だけで閉じた構成になっていて、フラストレーションを貯めずに読み進めることできる。

雑をいえば読み終わった後、ある種の曖昧さを感じたが、現状の活動銀河に対する我々の知識を考えると、致しかたないものかも知れない。もっとも、題名を鑑みると、当然のような気もする。

福重俊幸 (東大教養)

## 雑報

### 第 5 回天文教育研究会報告

1991 年 8 月 17 (土) ~ 20 (日) に、愛知県刈谷勤労福祉会館 (愛知県刈谷市) で第 5 回天文教育研究会 (全国大会) が開催されました。天文教育研究会は、天文教育と天文普及に関する研究発表ばかりでなく、それらに関する情報交換の場を提供することを目的として、毎年 1 回、天文教育普及研究会 [代表: 磯部琇三 (国立天文台)] の主催で行われているものです。今回で 5 回目 (天文教育普及研究会が発足してからは 2 回目) になりますが、毎回、小・中・高校の先生方、教育センターの方、大学・研究所などの研究者、プラネタリ

ウム館、科学館、博物館、公共天文台など社会教育にたずさわっている方、アマチュア活動家、天文機器メーカーの方など、さまざまな立場の方々が全国から参加しており、ユニークでかつ有意義な会となっています。今回の参加者は 163 名で、毎年増える一方です。

今回の会は松本敏雄氏 (名大・理) の一般公開講演会「赤外線で見える宇宙」で始まりました。2 日目は会のメインテーマである「天文学者と天文教育研究者の交流—天文教育実践への提言—」のもとで、「夜間観望会」、「プラネタリウム」、「授業実践」の 3 つのテーマについて、パネルディスカッションを行いました。この日の参加が最も多



パネルディスカッションの一コマ

く、関心の高さがうかがえます。ただ、ディスカッションに十分な時間がとれなかったことと、報告者、パネラー、座長間の事前の打ち合わせを全く行わなかったため、メインテーマの内容に深く入れないままに終わってしまったことは残念でした。3日目は分科会で、各自の研究発表とそれについての議論（口頭発表36、ポスター発表6）が3会場で活発に行われました。また、この日は今回の目玉の一つである「研究入門講座」という特別分科会も開かれました。これは「余暇をうまく利用すれば、誰でも自宅で天文学の研究を行うことができる」をキャッチフレーズに、渡辺堯氏（名大・太陽地球環境研究所）ら3名から、具体的テーマや方法についての報告を行ってもらったもので、大盛況でした。最終日は地区別打ち合わせ会、総会を開き、今後の天文教育普及研究会の活動の一つとして8つのワーキンググループ（会則検討WG、観望会検討WG、プラネタリウムWG、指導要領問題WG、顕彰制度検討WG、星の明るさと色WG、公共天文台検討WG、入試問題分析WG）を作り、問題点などを整理していくこと、1992年の8月6日－9日に神奈川県相模セミナーハウスで次の全国大会の開催を行うことにして閉会しました。表面的な報告はこのくらいにして、すこし裏の報告も含めておきます。

全国大会は今年で5回目で、参加者は毎年増え続けています。しかし、今回を含め、研究者の参

加はきわめて少ないのが現状です。しかも参加している研究者のほとんどが教育系大学の所属で、理学部や研究所所属の研究者の参加は皆無に近い状態にあります。「天文学の発展のためには、研究者も多数参加すべき」という立場から、できるだけ多くの研究者に出席していただく（実はむりやり出席させる）方策を考えました。その方策とは、先にも述べましたが「天文学者と天文教育研究者の交流」のメインテーマのもとで3つのパネルディスカッションを行い、それぞれについて研究者1名をパネラーとして無料招待する（自費参加させる）というものです。最終的に無料招待に応じていただいたのは、森本雅樹氏（国立天文台・野辺山）ら3名でした。とにかくこのような設定を行い、積極的に宣伝すれば、パネラー以外にも何人かの研究者が自主的に参加するであろうと考えたわけです。しかし、残念ながら、我々の期待はみごとにはずれ、パネラーとしてお願いした3名以外の参加はありませんでした。できるだけ多くの研究者を参加させようとしたメインテーマの裏のねらいは完全に失敗したのです。

天文教育研究会としては、このように研究者の参加が少なく、まだ十分なものではありません。研究者の方々もぜひ一度全国大会に参加され、天文教育や天文普及にたずさわっている方々の天文に対する熱意を見ていただきたいと思います。

今回の研究会の集録は秋の天文学会に合わせて発行されています。多数の研究発表と活発な議論等で、300ページを越す膨大な集録になりました。集録をご希望の方は、国立天文台天文情報普及室天文教育普及研究会事務局まで直接申し込んで下さい。1冊1200円です。その際返信用の封筒に住所を書き310円切手を貼って下さい。

最後になりましたが、パネルディスカッションの報告者、パネラーおよび座長、研究入門講座の講師などの無料招待に快く応じて下さった方々に、この場をかりて深くお礼を申し上げます。

沢 武文（愛知教育大）